

留学報告書 (2019年12月)

Funai Overseas Scholarship 2016年度 奨学生 今里 和樹

1. はじめに

今年もハロウィン当日に雪が積もるなどシカゴの冬は全力です。4年目に突入しそろそろ卒業後のことも考えつつ自分のできることを毎日コツコツやろうと心がけています。

2. 研究

非常にホットなプロジェクトを入学時からいただいたことから、ここまでかなり順調に進んできました。ただし、その一つのプロジェクト(材料)にほぼすべての時間を使ってきた分、なかなか広がりが出てこないのが最近の悩みです。今後研究を続けていくうえで、どのようなテーマを自分から生み出せるか、深さだけでなくどれだけ広さも出せるか、といったところが今後の課題だと思っています。前回の報告書提出から出版された論文はこちらです。^{1, 2}

3. 学内の Fellowship に応募

以前の報告書で書いたこともあったと思いますが、アメリカの PhD でお金が出るといっても、自分で Fellowship を持っているとは自由度が大きく違います。さらに、Fellowship を取った実績はあるフィルターを通して評価されたことを意味するので、卒業後の進路やさらなる Grant、Fellowship を獲得する好循環を生むために必要なものだと考えています。

入学してから二年間は船井財団からの補助をいただいていたわけですが、3年目以降は特に Fellowship を受けていたわけではなかったので新しく学内のいくつかの奨学金に応募しました。研究分野がエネルギー関連材料だったこともあり、Institute for Sustainability and Energy at Northwestern (ISEN) という団体から Cluster Fellowship という形で今年はサポートをいただくことが決まりました。NSF などはアメリカ人のみが対象ですが、探してみるといろいろと学内でも自分の分野にかぶるような Fellowship があつたりしますし、毎年応募できるものもあると思います。船井奨学金をいただいたという結果が有利に働くこともありますし、アメリカ人、ほかの留学生と同じ土俵で勝負すること自体が今後の経験にもなると思いますので積極的に調べて挑戦してみることをおすすめします。

4. 学生団体の活動が活発

入学して以来感じていたことですが学部内での学生団体が日本に比べてカリキュラムなどに強く働きかけていることに違いを感じています。材料工学科は MSSA (Material Science Student Association) という団体が教授陣とのコミュニケーションの窓口になっているのですが、半年に一回学生で集まって“卒業要件が厳しすぎて研究ができない”とか、“ポリマーの研究をしているので必修の金属の授業を取る意味が分からない”とかカリキュラムに対する意見(不満?)が集められます。その一週間ほど後には直接その意見をまとめて学生と教授陣と一緒にディスカッションをする Town Hall meeting というものが開かれ、実際にカリキュラムに変更が起きたりすることもありました。例えば、私が入学した年は授業を 15 コマ履修しなければいけなかったのに、現在は 12 コマに減り、必修として新しい授業ができるなど、変化も些細なものではありません。こういった学生団体の行動力は日本の大学院では見られないので驚きました。教授陣と学生がともに学部の文化教育システムを作っていく部分において見習う部分もたくさんありました。また、多少の痛みと面倒くささがあっても学科のカリキュラムの向上のために(未来の学生のために)しっかりとコミュニケーションをとっていく姿勢は学生側に主体性があってこそできることだと思うので、アメリカ人の行動力に感心することも多いです。



図 1 シカゴのダウンタウンの夜景がきれいに取れたので載せておきます。

5. 学会を主催

指導教官の50歳の誕生日をきっかけに、Northwestern Universityで小さい学会を主催しました。グループの卒業生やコラボレーターが集まりアメリカ全土、ヨーロッパ、アジア各国から50人くらいが集まりました。昔のグループの写真で盛り上がり、学会を通して非常にいい雰囲気を経験できると共に、教授の人脈、実績を感じるいい機会になりました。卒業生には企業で働いている方から、大学の教授として自分のグループを持っていたり、こういった輪の中でコネクションを広げられる機会としてもとてもいいきっかけになりました。

学会の準備をするうえで、大変だったのはプログラムがなかなか決まらなかったり(指導教員の性格もありますが笑)、食事やコーヒープレイクがしょっちゅうあるのでその用意がなかなかスムーズにいかなかったり、まったく研究とは関係のない部分で苦労が多かったことです。ただ、今まで完全に参加するだけだった学会の裏側を見られるという意味で貴重な体験でした。普段参加するような大きな学会はもっと多くの人が動いてくれているということを理解して、自分たちが研究発表に集中できる環境にもっと感謝していくべきだなと考えを新たにしたところです。

6. 二度目の引っ越し

渡米時には大学の寮に住んでいて、一年目の終わりに韓国人のルームメイトと共に、キャンパス目の前のアパートに引っ越しました。そして、この9月には少し学校から離れた(電車で30分ほど)アパートに引っ越しました。引っ越しが面倒な作業であることはわかっていましたが、決断した理由は二つあります。

まず一つ目はアメリカ人と住んで、アメリカの文化、生活をより身近に感じてみようと思ったこと。新しい部屋では二人のアメリカ人と一緒に生活しています。渡米時はネイティブと暮らせるほど英語力もなく、ストレスの少ないであろう留学生(アジア人)とルームシェアをすることを選択しましたが、シカゴでの生活にも慣れて、英語にもそれなりに自信がついたところで、より自分の生活の中でネイティブの色を強く感じられるようにし、英語でのコミュニケーション能力を高めたいと思ったからです。

もう一つの理由は研究以外の生活自体にもう少し比重を置こうと思ったからです。以前の



図2 アメリカ人と住むことになったこともあり初めて自分の家で Friends Giving Party を主催しました。Thanks Giving にはみんな家族のもとへ帰ってしましますが、その前に友達で集まろうという会です。

報告書でも述べたように、留学するといっても研究だけがすべてではなく、アメリカの都市で生活するという体験自体が貴重で面白い経験だと考えています。初めの3年間はオフィスから歩いて10分、真夜中でも、休日でも研究ができるような環境で実験漬けの生活を送っていましたが、結果が出てきたこともあり、自分でしっかり研究のペースをつかみながらシカゴの街を楽しむように少し離れた場所に移動することにしました。とはいえ研究に手を抜くつもりはなく、同居する一年先輩の友達と毎日ディナーを作ったり、朝コーヒを飲みながら研究の話をするなどして知識を固めていく環境は整っていると思います。この決断が研究結果にどのように働くかはまだ未知数ですが、留学を楽しみつつ、成果を出せるように今後も頑張っていこうと思います。

6. おわりに

研究の進め方もだいぶ道筋が見えるようになり、どのように結果をまとめて博士論文にするかということを考え始める時期に近づいていることを実感します。自分ができることは何か、自分がやりたいことは何かを考えながら、一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。

文献

1 doi.org/10.1002/advs.201902409

2 doi.org/10.1002/adma.201902337